

こども向け環境教育プログラムの開発について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芦原, 誠一, 井之上, 俊治, 松元, 正美, 野下, 治巳, 松野, 嘉昭, 内原, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10232/2794

こども向け環境教育プログラムの開発について

芦原 誠一・井之上俊治・松元 正美
野下 治巳・松野 嘉昭・内原 浩之
(農学部附属演習林)

はじめに

教育研究施設である大学演習林に近年あらたに加えられたキーワードが「環境教育」である。多様な自然環境を有する森林は、環境教育の舞台として重要な場のひとつである。環境教育の重要性が高まるなか、教育プログラムの開発と指導者養成が急務であるとされている。これは大学演習林に期待される事のひとつでもあると考えられ、当演習林でも様々な企画を実施している。本稿では演習林で実施している企画を紹介しながら、プログラム開発時に注意した点について報告する。

14年度に実施した企画内容

- 「こども森林教室」(総合的な学習の時間等として小学校3校8クラスが来演。森林散策と源流探検)
- 「森と遊ぼう」(地域開放事業。小学生高学年を対象にした公募企画)
- 「森林環境教育の進め方講座」(公開講座。小中学校教諭を対象とした企画。指導者養成が目的)
- 「森林教育入門講座」(農学部の学生を対象とした講義。教育学部「野外教育実習」と合同で実施。こども向け2泊3日のキャンプを運営する。指導者養成が目的)

テーマの設定 —何を伝えたいか?—

演習林には環境教育の素材となるものが様々あるが、毎日の業務の中で気がついた事柄をピックアップしていくつかの新しいプログラムとその実施マニュアルを作成した。その際に重要なことはこども達に何を伝えたいのかをはっきりさせることである。そこで実施マニュアルを作成することでプログラム細部の曖昧だった部分が明確になったほか、文章化したことでスタッフ間でのプログラム目的の共有化・意思疎通にも役立てることができた。

きめ細かいフォローを —野外が苦手な子もいる—

新企画「森の美術館」は、小学生自身が森の木をノコギリで切って運び出し、それを素材にしていろいろなものを作ろうというものである。これは昨年度の企画「きこりにチャレンジ!」(人工林の間伐、枝打)をアレンジしたものである。こども達にとっては林業体験そのものが新鮮な経験で意義あることといえるが、なかには生きている木を切ることに抵抗を感じる子や、一風変わった体験をしたということで終わってしまう子も多いと考えられる。そこで今回は「間伐の必要性を体験を通じてわかりやすく」「切った木は最大限に利用しよう!使い続けよう!」という点を企画のねらいとして繰り返し強調した。せっかくの活動がその後の「野外恐怖症」につながらないようにするフォローが大切である。「土は汚い」「虫は苦手」などという考えに対処できるプログラムも必要であろう。

ふりかえり —「ホットな感想」を捨てない—

プログラムを実施したその日のうちにスタッフ全員での反省会を必ず行い、それをふまえて改善したものを翌日に再実施するということを繰り返し行った(これは垂水小学校6クラスが相次いで入林したことを利用した)。実施直後にはスタッフ各人もホットな感想(反省)を持っており、それを全員で共有することがプログラムの実施技術や実施マニュアルの改善に役立った。

ま と め

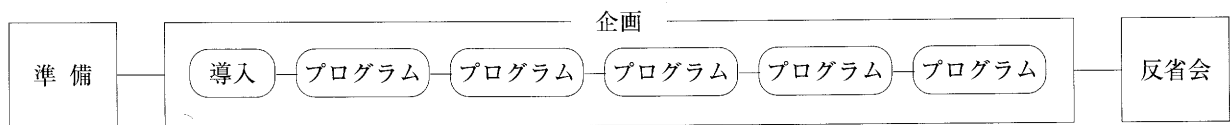
プログラムの開発に際してはテーマをはっきりと持ち、「企画のねらい」を常に念頭においた指導を心がけることでより充実した企画になった。また、抵抗感を感じさせることなく野外活動に参加させる工夫（特に企画の導入部での工夫）が必要なこと、「立案→実施→ふりかえり→再実施→ふりかえり」という流れが重要なことを報告した。

今後も以下の点に注意して、「演習林発」のプログラム開発を続けて多様な要請に応えていきたい。

- ① こども達に伝えたいことを明確に
- ② 「野外嫌い」にさせない工夫を
- ③ 「ふり回り」とフィードバックの励行

なお本稿ではふれなかったが、大学生スタッフの協力を得て実施した企画があった。限られた演習林スタッフのサポートや新しい発想が得られただけでなく、指導者養成という大学施設本来の目的にも合致した新しい方向性を見出せた。

また14年度の企画から派生した動きとして、指導者養成講座の開講要請（地元垂水小学校教諭・PTA対象）、出前授業の要請（出水中学校）などがあることを付け加える。



図一 「企画」と「プログラム」の概念図

水の旅 ～水になって川をくだろう～		
目的： 人は水がなければ生きていけない。日常生活と切っても切れない水のことを考えたうえで、川のはじまりにむけて出発する。水が循環していること、水の大切さを知る。		
解説： 川を下りやがて雨となって山に帰ってくる水になった気持ちにさせる。川登りをする前に、あしもを流れる水がどこを流れて何に使われているか、また雨水がどうやってこの川に集まったかを、静かに目を閉じて想像させる。		
時期：場所：対象： 川登りのスタート時や川遊びの最初に。11月いっぱいまで？		
準備： 川のたんけんの準備全般（コース下見） 用具： 串良川の流域図、ヘルメット		
手順： ①事前に	説明： ・流域図をみせる	注意：ヒント： たとえば ・枯木かな根かな？なんでそう思った？

図二 プログラムの実施マニュアル（部分）



図三 傘を使って問伐の仕組みを説明



図四 充実してきた源流探検プログラム